

# 日本IT書紀

180 市ヶ谷乱入

10 迅風篇  
卷之二十五 懊惱

佃均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

第百八十

市ヶ谷乱入

一

それは六八年の十月二十一日「国際反戦デー」のことだったという。

新左翼各派と機動隊の衝突を見つめていたサンングラスの男がいたことを、当時、陸上自衛隊一佐・調査学校情報教育課長だった山本舜勝が記録に残している。

その男の名は平岡公威という。

一九二五年一月十四日東京に生まれ、学習院から東大法学部に進んだ。学習院中等科在学中から小説を書き始め、川端康成に見出されて世に出た。世の中の通り名は「三島由紀夫」。

『仮面の告白』『愛の渴き』で作家としての地位を確実にし、五年の『禁色』、四年の『潮騒』、六年の『金閣寺』で阿部公房と並んで戦後日本を代表する作家として世界に知られた。

だが彼は小説の世界だけでは飽き足らなかつた。

来る七〇年安保の騒擾で自衛隊の治安出動があるかもしれない、と考えた山本は、調査学校の学生である自衛官数十人と「楯の会」の十数人をデモ隊に紛れ込ませていた。現場の空気を肌で感じ、新左翼闘士たちの心理の動きや行動パターンを探らせるのが目的だった。

デモが終わったあと、彼らは永田町に用意した某所に集まることになってた。山本は私服で御茶ノ水から某所まで、三島とともに歩いた。あたりは機動隊が発射した催涙ガスで充満し、サンングラスの下の彼の眼も真赤に充血していた。

『戦後史開封』（一九九五、産経新聞社）によると、山本が三島と知り合ったのは六七年十一月だった。仲介したのは陸自第一師団長の藤原岩市だった。

そのとき三島は、

——七〇年安保闘争で六〇年安保と同じように二十万人規模でデモ隊が蜂起したら、警察力ではどうしようもない。自衛隊の治安出動には、市民の協力が欠かせない。そのために祖国防衛隊を作りたい。

ということを言った。六八年三月に二十人程度の学生を自衛隊に体験入隊させることが決まった。その学生たちが中心となって「楯の会」が結成された。

『戦後史開封』は次のように記す。

自衛官や楯の会のメンバーが三々五々、アジトに引き上げてきた。山本は、「騒乱は終わった。われわれの演習も終わった。解散」と告げた。

が、三島は「この場でわれわれは立ち上がるべきだ」と勇み立ち、山本と対立した。三島と山本の関係は急速に冷えていく。

「三島さんは騒乱事件を契機にクーデターのようなものを起こせば、と考えていた。しかし、われわれとしては騒乱が鎮圧されれば、それでいいわけで、結果的には目的が違っていたということになります」

山本の述懐は、自衛官として正しい判断といっている。

翌六九年五月十三日、三島は東大全学共闘会議駒場共闘焚祭委員会主催の学生との討論会に単身で出席した。会場は東大駒場教養学部九〇〇番教室だった。午後二時五分に始まった討論会は三時間近くに及んだが、その中ごろで三島は、

「たとえば安田講堂で全学連の諸君がたてこもった時に、天皇という言葉を一言彼等が言えば、私は喜んで一緒にとじこもったであろうし、喜んで一緒にやったと思う」と発言した。

二時間半が経過し、議事進行者が

——時間の都合でそろそろ終りたいと思う。

とし、三島に「若干の感想」を求めた。

このとき、出席者と三島との間で最後のやり取りがあった。

**全共闘** これは会場の諸君とは関係ないですけども、ぼ

くから三島さん呼びかけたいのですが、ぼくは「あなたに共闘していただきたい」と。さっきあなたは、もし諸君が天皇という言葉を口にしたならば、喜んでやるだろうとおっしゃった。

(中略)

三島氏がさっき言ったことがほんとうとするならば、三島氏はよくと共闘してくれてしかるべきだと思う。

**三島** いまの言葉は非常に感銘が深く聞きました。

(中略)

私は諸君の情熱は信じます。これだけは信じます。ほかのものは一切信じないとしても、これだけは信じるということはおわかっていただきたい。

**全共闘** それで共闘するんですか？ しないんですか？

**三島** 今のはひとつの詭弁的な誘いでありまして、非常に誘惑的になつたけれども、私は共闘を拒否いたしました。

す。(笑・拍手)

この討論は、後日、新潮社から『討論三島由紀夫VS東大全共闘《美と共同体と東大闘争》』というタイトルの本にまとめられた。その末尾に置かれた「討論を終えて」で三島は、

「概して私の全共闘訪問は愉快的な経験であった」と書き出している。

## 二

『年表作家読本 三島由紀夫』（河出書房新社）などから、一九七〇年十一月二十五日に起きた出来事の顛末のみを再現する。

その日の午前十一時、三島は小賀正義運転の四一年型白色のコロナで東京・市ヶ谷の陸上自衛隊東部方面総監部正面玄関で降りた。同行したのは「盾の会」の学生四人だった。

このとき一行は「楯の会」の制帽、制服に身を固め、三島は軍刀を腰に下げていた。前日、総監・益田兼利（陸将）に面会の約束を取り付けていたため、沢本泰治（三等陸佐）が総監室に案内した。

応接室で益田が

「先生は、そのような軍刀をさげてとがめられませんか」と尋ねると、三島は

「この軍刀は、関の孫六を軍刀づくり直したものです。鑑定書をごらんになりますか」

と云って、鑑定書を示すとともに、軍刀を抜いて見せた。益田は刀をよく眺めてから、三島に返し、

「いい刀ですね」

と云った。刀と取り交えるかたちで、三島は「これを」

と云って、折られたんだ書類を益田に渡した。

その冒頭には「要求書」と書かれていた。その間に、小賀が席を立ち、いきなり益田の首を腕で締め、同時に小川と古賀がロープで両手、両足を椅子に縛りつけた。

「ふざけたことをするな」

と益田が大声を出した。

外にいた自衛隊員が物音に気づき、隣接した会議室に飛び込んで急を知らせた。

そこでは中村董正二等陸佐らが会議を行っていた。このときすでに総監室正面のドアは、内側からバリケードで封鎖されていた。すりガラスにセロテープを貼って中の様子をうかがうと、幕僚長室と幕僚副長室に通じるドアが手薄

なのが分かった。

幕僚長室から体当りで総監室のドアを開けた瞬間、三島が軍刀で斬りかかった。前後して幕僚副長室から会計課予算班長の寺尾克美（三等陸佐）らが飛び込み、短刀で武装した学生の一人と格闘になった。

行政副長・山崎峻（陸将補）ら七人が背中や手足に負傷し、六人が入院した。中村は全治六か月の重傷だった。

三島が益田に軍刀を突きつけていたため、幕僚副長・吉松秀信を残して全員が総監室から出た。

「要求書を堂々と読んでみろ」

という吉松に対して、三島は

「書いてある通りだ」

と繰り返すだけだった。

三島が軍刀で突きかかってきたため、吉松も退出せざるを得なかった。

こうして総監室が占拠された。

立て籠もった五人は、日の丸に「七生報告」と墨で書いた鉢巻さしめた。短刀は三島携行のアタッシュケースに収められていたものだった。

破れたガラス窓越しに吉松は説得を続けたが、三島は「正午までに隊員を集めてくれ」と要求した。

吉松が同意すると、三島は「総監は必ず安全にお返しし

ます。私はバルコニーから演説する」といった。

東部方面総監部から警視庁に緊急事態が通知されたのは十一時二十二分だった。警視庁はただちに公安第一課警備局長室に臨時本部を設置、機動隊百二十人と私服警官を市ヶ谷に出動させた。

報道機関がそれを知り、テレビは、

「七人の男が自衛隊に乱入」

とテロップを流した。

十一時四十分、吉松が

「全隊員は本館前に集合するように」

と放送した。それに従って約八百人が集まった。

同五五分、森田、小川の二人が総監室前バルコニーに六項目の要求を書いた垂幕をさげ、檄文を撒いた。

午後零時五分、三島が森田とともにバルコニーに現れ、「檄」とほぼ同じ内容の演説を始めた。

——われわれ盾の会は自衛隊によつて育てられ、いわば自衛隊はわれわれの父であり、兄である……われわれにとつて自衛隊は故郷であり、生温い現代日本で凜烈の気を持つ吸できる唯一の場所であった。教官、助教諸氏から受けた愛情は測り知れない。しかもなお、敢てこの拳に出たのは何故であるか。たとえ強弁と云われようとも、自衛隊を愛するが故であると私は断言する。われわれは戦後の日本が

経済的繁栄にうつつを抜かし、国の大本を忘れ……。

隊員の反応は冷やかだった。

上空を旋回する報道機関のヘリコプターの爆音と自衛隊員の野次で、三島の肉声はほとんど聞こえなかった。三島の話し方はどなり声に変わり、野次が飛ぶ方向を見すえるように「オレのいうことがわからんのか」「静聴にしろ」とどなり返した。

「わたしの側に立つものはだれもないのか。生命より大切なものを教えてやる」

それを最後に三島は演説を止め、「天皇陛下万歳」を三唱して総監室に戻った。

切腹をしたのはその数分後だった。

益田が「介錯するな」と叫んだが、左後ろに立った森田必勝が刀を降り降ろした。次いで森田が切腹し、古賀浩靖が一太刀で介錯した。小賀正義、小川正洋、古賀浩靖が総監室を出て逮捕されたのは午後零時二十分だった。

三

当時、防衛庁長官（のち首相）だった中曽根康弘は同日、「全く遺憾な事態だ。常軌を逸した行動と言うほかない」とコメントした。

「せっかく日本国民が築きあげてきた民主的な秩序をくずすものだ。世の中にとってまったく迷惑だ」（朝日新聞同日付夕刊）

同日付夕刊）

中曽根は外人記者クラブの会見で

「楯の会をどう思うか」

と尋ねられて、

「宝塚少女歌劇を思い出す」

と答えて満場を爆笑させたことがあった。

これを聞いて三島は、

「人々はわれわれを玩具の兵隊さんと呼んで、わらっている。私が組織した楯の会は、会員が百人にも満たない。そして武器も持たない、世界で一番小さな軍隊である」

と皮肉を込めて語っていた。

読売新聞同日付夕刊は石原慎太郎のコメントを載せた。

「現代の狂気としかいいようがない。若い命をかけた行動としては、あまりにも実りないことだった」

司馬遼太郎は毎日新聞十一月二十六日付朝刊に次のように書いた。

「三島氏の死は文学論のカテゴリーに入るものである。

三島氏の場合、思想と言うものを美に置き換えてみると分かりやすい」

参院無所属の議員だった青島幸男は、こうコメントした。

「あれは一言でいえば、ひどく知性的なオカマのヒステリーだ」(十二月十一日付週刊読売)

野坂昭如は言った。

「ぼくはまだ愚かしく混乱しつづけている。ぼくにできることは、ただ喪に服するのみ」(十二月十二日付週刊現代)

澁澤龍彦は語った。

「とうとうやったか、という気がした。ただ、私は彼の思想はまったく信用していない。自分の信じていないことにだんだんのめり込んでいって、その結果がああいう行動になったんじゃないか」

ある自衛隊幹部はこう言い放った。

「この事件は、三島先生が自衛隊を片思いして、自衛隊がちよつと大事にしたから、ますますのぼせ上がった。ところが最近冷たくされ出したので、無理心中を企てた、というところですか」

防衛大学の学生のコメントも紹介された。

「ぼくにとつて、戦後いちばん不愉快な事件です。悪夢というか、白日夢というか一日も早く忘れてしまいたい事件ですよ。ぼくら、防大生だからといって彼の死に特殊な見解を持っているなんて思われたら、困りますよ」  
真つ向からその死を否定したのは金芝河だった。

「どうつてもたあねえよ。朝鮮野郎の血を吸って咲く蘭の花さ。かっぱらつていった鉄の器を溶かして鍛え上げた日本刀さ」

様々な解釈や意見があった。

「私はただ、諫止するすべはなかったかと悔やむばかりである」

と言った川端康成は、その一年半後の四月十六日、仕事場として使っていた逗子小坪のマンシヨンの一室で自殺した。

その死をめぐっても様々な解釈があった。

三島がこの行動に出る前、六八年七月の参院選に出る準備を進めていたことが、のちに明らかにされた。

石原慎太郎が一步早くその意思を表明していたので、三島は参院選をあきらめ、七一年に予定されていた東京都知事選に気持ち傾いた。それを知って、美濃部亮吉に対抗できる候補を探していた自民党は、七〇年に三島に接触したが、

「そういう時機は過ぎた」  
とそつげなかつた。

三島は、六八年十月二十一日の騒擾を目撃し、決起を迫つた山本舜勝にあつさりかわされ、六九年に入って陸上自衛隊統合幕僚監部第三室(作戦担当)に招かれたとき、楯

の会と自衛隊によるクーデター構想を熟弁した。

このとき出席者から

「改憲は国会のOKが必要です。二・二六の再現は夢物語です」

と相手にされなかった。

五月に行われた東大全共闘との討論会でも決起に賛同を得ることができなかった。六月九日のASPARC反対闘争、十月二十一日の国際反戦デーで新左翼各派は局地的な騷擾状態を生み出したが、機動隊の警備力をはるかに勝った。

新左翼の騷擾に対して自衛隊が治安出動する可能性がなくなつた。

事件から二日後、警視庁公安部は

「三島らの目的は、精強の三十二連隊をしてクーデターを起こさせることであつた」

と発表した。裁判における検事諭告は

「本件を具体的に計画する段階においてはすでにクーデター計画はなかつたと見られる」

とし、同判決文では

「自衛隊と結託して政治的野望を遂げようとか、武力革命を自衛隊にそのかしたとかいう点はいかががえず」

と明確に否定した。

自衛隊を憲法第九条の枠内にとどめる限り、クーデター

計画そのものを否定せざるをえなかつた。

三島が市ヶ谷での決起を決意し、森田、小川、小賀、古賀を交えた共同謀議を行ったのは、裁判判決によると

「七〇年四月ごろ」

であつて、

「改憲を熱望していた森田の独力で国会を占拠し改憲を發議せしめようとの提案が契機で本件を計画決意」

したと、森田必勝が果たした役割を重視している。

再び七〇年十一月二十五日午後零時二十分過ぎに時間を戻す。

バルコニーから三島の姿が消え、「わけがわからんぞ」「総監を解放しろ」「垂幕を降ろせ」などと野次を飛ばしていた自衛隊員は、とりとめなく散会した。

上空に報道機関のヘリコプターが旋回し、パトカーと救急車が駆けつけ、報道陣のカメラが放列を作るなか、広場に近いバレーコートでは運動着の隊員たちのバレーボールが始まつていた。

#### 四

産経新聞の記者だった河端照孝が三島と知り合ったのは六八年だった。河端は武道家向けの雑誌「月刊秘伝」二〇



○三年七月号に、三島由紀夫とのことをこう書いている。

三島さんは竹刀剣道と居合をやっていますね。私が天真正自源流をやっていると話すと、抜刀を見せてくれたりしましたよ。長い刀を遣っていたのが印象的です。

私は鑑定の勉強もしています、その後ご自宅で二振り、鑑定を頼まりました。そのうちの一本が、最期の自決に使用されたものでした。残念ながら、介錯を頼んだ青年の斬り込んだ刀は、固い骨に当たって、一回では打ち下ろせなかったようですが。

私実際に三島さんに「切腹の作法」を話したのは昭和四十四年の六月。父に教わった作法でした。

この河端から、三島はコンピュータの知識も仕入れていた。東大全共闘との討論集会で、コンピュータについて触れただけがある。

日本という国は二十一世紀になるとどういう国になるだろうか。(中略)次々とコンピュータがカチカチカチカチと音を立て、あらゆるビルディングの中はちょうどマジソン・アベニューとおんなじになってしまう。われわれは管理あるいは技術管理だけに生きる時代がきてしまっ

接的な生産関係というものから切り離されてしまう。

諸君が言われる自然への復帰ということは、(中略)私はバリケードとか石とかいうものは、これは非常に直接的な自然への復帰の感覚だろうというふうに理解している。私はもう少し文明が進歩している私のほうは目下日本刀へ復帰しつつあるし(笑)——大体私は核だとか近代兵器なんというものを信じちゃいないのです。

彼がコンピュータやネットワークというものをどう捉えていたかなど、小ざかしい詮索はしない。六八年に川端康成がノーベル文学賞を受賞してから、三島の心境がどう変化したか、という謎解きめいた推理は、もとより本書の主題ではない。

三島はボディビルで肉体を鍛え、金のネックレスをし、カフスといういでたちで幅広い交友を持った。

「武士たらんとするものに、金のネックレスは似合わないじゃないか」

とからかわれたとき、三島はいった。

「ボクは、そういつてボクを笑っているヤツラを笑っているんだ」

楯の会のために西武百貨店に特注したピエール・カルダ

ンのデザインによる制服は、「おもちゃの兵隊さん」とはやされ、中曽根康宏には「宝塚少女歌劇団のようだ」と揶揄された。そういう社会を三島は笑っていたのだろうか、その死の意味は多くの人に謎を残した。

おそらく福田恆存の指摘が最も射ているように思う。「三島とは全く立場が違うが、全くわからない。理解できない。実際のところが分からない。私には将来、永遠わからないだろう」（十二月十二日付週刊現代）

## 補注

山本舜勝 やまもと・ときかつ／10100～20001。愛知県に生まれ、一九三九年陸軍士官学校を出て歩兵第二十連隊付少尉、四一年戦車第十二連隊中隊長、戦車第一師団参謀部付、千葉戦車学校教員、四四年少佐。五二年警察予備隊に入り六九年陸上自衛隊調査学校校長を経て陸将補となった。「楯の会」の指導官だった。

藤原岩市 ふじわら・いらいち／1908～1986。兵庫県に生まれ陸軍予科士官学校、陸軍士官学校を出て歩兵第三十七連隊付少尉となった。四一年十月「マレーの虎」と異称された谷豊を使つて現地で情報活動を展開、次いでチャンドラ・ボース(Chandra Bose／1897～1945)によるインド国民軍創設を支援した。五五年陸上自衛隊に入り五六年陸上自衛隊調査学校校長、第十二師団長、第一師団長を歴任した。

益田兼利 ました・かねとし／1913～1973。陸上自衛隊第二師団師団長、東部方面総監を歴任した。三島事件で人質になつた自責して退官した。

三島由紀夫の檄 全文三千二百十文字(署名を除く)の長文で、B4用紙二枚に三島の肉筆で筆記されていた。『三島由紀夫全集 34巻(評論X)』(新潮社、一九七六)に収録。

中曽根康弘 なかそね・やすひろ／1918～2019。群馬県に生まれ四一年東京帝国大学を出て内務省に入った。終戦時海軍主計将校だった。四七年群馬三区から衆院議員となり保守合同のときは河野派に属した。五九年岸内閣で科学技術庁長官、六六年中曽根派を結成し六七年親佐藤派に転じ佐藤内閣で運輸相、防衛

庁長官、党総務会長を歴任した。七二年田中内閣で通産相、七四年三木内閣で党幹事長、八〇年鈴木内閣で行政管理庁長官を経て八二年党総裁、首相となった。「小さな政府」「民活」「規制緩和」「自由競争」の四原則を掲げ、三公社五現業の民営化を推進した。八六年七月の衆参ダブル選挙で自民党三百議席超の大勝をもたらしたが、消費税導入で支持を失い八七年十月竹下登に政権を譲つた。八九年五月リクルート事件疑惑で国会証人喚問を受け自民党を離れたが、のち復党し二〇〇二年引退した。

石原慎太郎 いしはら・しんたろう／1932～2022。神戸市に生まれ五五年一橋大学在学中に書いた小説『太陽の季節』で第三十四回芥川賞、第一回文学界新人賞。以後大江健三郎、三島由紀夫などと並ぶ人気作家となった。六八年の参院選でトップ当選し、七二年衆院に転じた。七五年東京都知事選に出馬したが落選、再び衆院議員となつて七七年福田内閣で環境庁長官、八七年竹下内閣で運輸相、八九年自民党総裁選に出て敗れ、九五年国会議員動続二十五年表彰を機に議員を辞職し九九年東京都知事となった。作家としての主な著作は『太陽の季節』のほか『亀裂』(五六年)、『完全なる遊戯』(五七年)、『化石の森』など。評論に『NO』といえる日本『国家なる幻影』などがある。

司馬遼太郎 しば・りょうたろう／1923～1998。本名は「福田定一」。大阪に生まれ四三年大阪外語大学を仮卒業して陸軍に応召、四四年満州陸軍四平戦車学校第一期生となり見習士官として旧牡丹江省寧安県石頭の戦車第三小隊長となった。四五年本土防衛のため戦車六十輜とともに新潟を経て栃木県佐野に駐屯しているとき終戦となった。四六年新日本新聞社に入ったが四八年倒産のため産経新聞に移つて文化部記者となり、五五年から文筆

活動を始めた。ペンネームは『史記』の司馬遷にちなみ「遙かに及ばない」の意を込めて「遼太郎」とした（遼は「はるか」とも読む）。五八年『梟の城』、五九年『大阪侍』、六〇年産経新聞大阪文化部長のとき直木賞を受賞、六二年から産経新聞に『電馬がい』を連載し、以後、独特の時代小説・歴史小説を開拓した。小説の題材は源平、室町、戦国、幕末維新、明治大正と広範に及び、古代史研究や民俗学、地誌学、文学の考察を残した。

**青島幸男** あおしま・ゆきお／1932～2006。東京・日本橋の仕出弁当店「弁菊」の次男として生まれ五五年早稲田大学商学部を出て大学院に進んだ。このころから放送作家として活動し五六年早稲田大学大学院を中退してプロの道に入った。五九年フジテレビジョンのバラエティ番組「おとなの漫画」の脚本を手がけたときハナ肇とクレージーキャッツと出会い、同年日本テレビの「シャボン玉ホリデー」に飛入り出演して「青島だ〜」のギャグが人気となった。クレージーキャッツの「スターダスト」「ドント節」で歌謡曲の作詞家としてデビュー、植木等を主人公としたサラーマン映画「無責任シリーズ」で映画の脚本も手がけた。六八年参院選全国区に立候補し街頭演説など選挙運動をせず当選した。七一年国会代表質問で首相・佐藤榮作に「アメリカ政府の男妾」と発言し物議をかもした。九五年東京都知事選に立ち当選、世界都市博覧会の中止を決定した。九九年東京都知事を任期満了し石原慎太郎にバトンタッチした。

**野坂昭如** のさか・あきゆき／1930～2015。神奈川県鎌倉に生まれ、一九四五年空襲で養父を失い実父に引き取られた。旧制新潟高校を経て早大文学部仏文科に入り七年間在籍した。この間、アルバイトで「伊東に行くならハトヤ」のCMソングやコ

ント、テレビ番組の台本などを書いた。六三年「おもちゃのチャチャ」でレコード大賞作詞賞、小説「エロ事師」、六七年『火垂るの墓』『アメリカカひじき』で直木賞、焼跡闇市派といわれた。七二年雑誌「面白半分」編集長となり八三年参院選比例代表制で当選した。九七年『同心円』で吉川英治賞、二〇〇二年泉鏡花賞。

**海澤龍彦** しぶさわ・たつひこ／1928～1987。本名は「龍雄」。東京に生まれ東京大学文学部フランス文学科在学中シユールレアリスムに刺激を受け、アンドレ・ブルトン、マルキ・ド・サドに傾倒した。五四年ジャン・コクトーの『大股びらき』を出版して以後、フランス文学の翻訳を行った。五九年サド著『悪徳の栄え・続』翻訳が発禁処分となったが、『夢の宇宙誌』などエッセーや美術評論、中世の悪魔学など幅広い分野で活躍した。『唐草物語』『うつろ舟』『高丘親王航海記』など小説も手がけた。

**金 芝河** Kin Chi-Ha／キム・ジハ／1941～2022。ソウル大学を出て反体制詩人となり、七四年反体制政治犯として無期懲役の判決を受けたが八〇年釈放。韓国を代表する詩人・劇作家として知られ、『五賊』『黄土』など代表作がある。

**福田恆存** ふくだ・つねあり／1912～1994。東京に生まれ一九三六年東京帝国大学英文科を出て中学教師となった。在学中から戯曲と評論を執筆し、第二次大戦後、文明論や社会論を展開した。『近代の宿命』『二匹と九十九匹と』（四七年）、『芸術とはなにか』（五〇年）で評論家としての足場を固め、五三年アメリカに留学後、平和論を展開した。六三年現代演劇協会を発足させ劇団「雲」（のち劇団「昴」）を結成、多くの戯曲を書いた。個人全訳『シェイクスピア全集』を完成させている。

# 日本IT書紀 180 市ヶ谷乱入

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会  
<http://www.ossaj.org/>  
[info@ossaj.org](mailto:info@ossaj.org)

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。